山崎弁栄上人口述

念佛三十七道品御講演聽書

橋爪勇哲編

大蓮社鏡誉明阿光雲余静 抄写

無縁上人廣島縣佐伯郡廿日市町（十九年）瀬吉町ニ於テ

三十七道品御講演（梅原実翁上人讀書之写）

附り 参考 聖文 抜出

大正八年十月十二日ヨリ

仝　廿日ニ至ル（五日間別時念佛中）

仝十七日（別時第三日）朝ヨリ廿日迄四日間

晨朝午前午後八席ニ亘ル講話筆記

廣島縣佐伯郡廿日市町

潮音寺ニ於テ

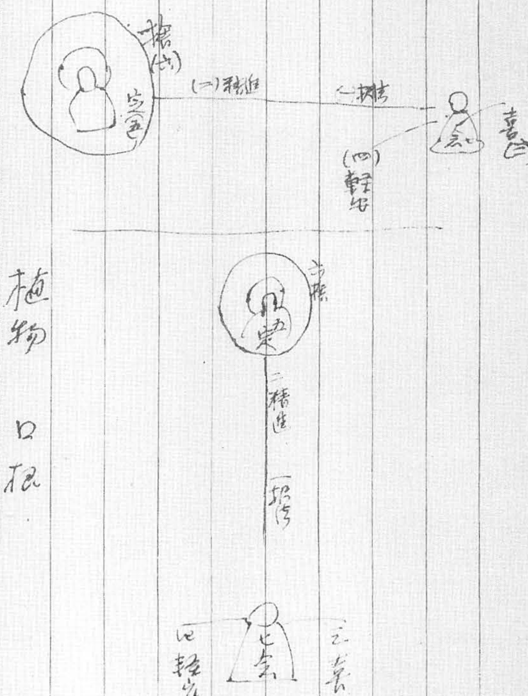
橋爪實識

耳書

辨榮聖者講話

（念佛）

三十七道品

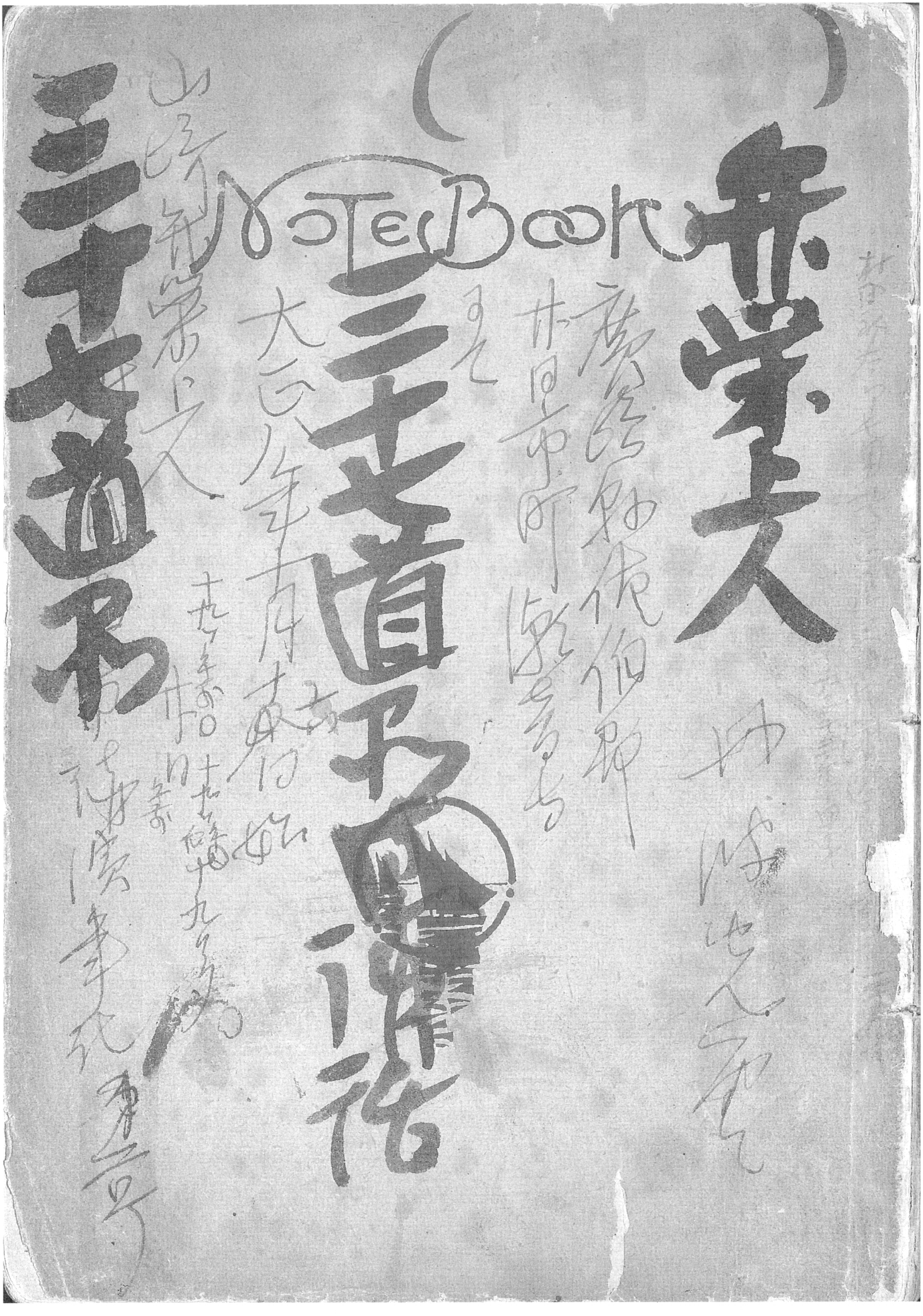


植物

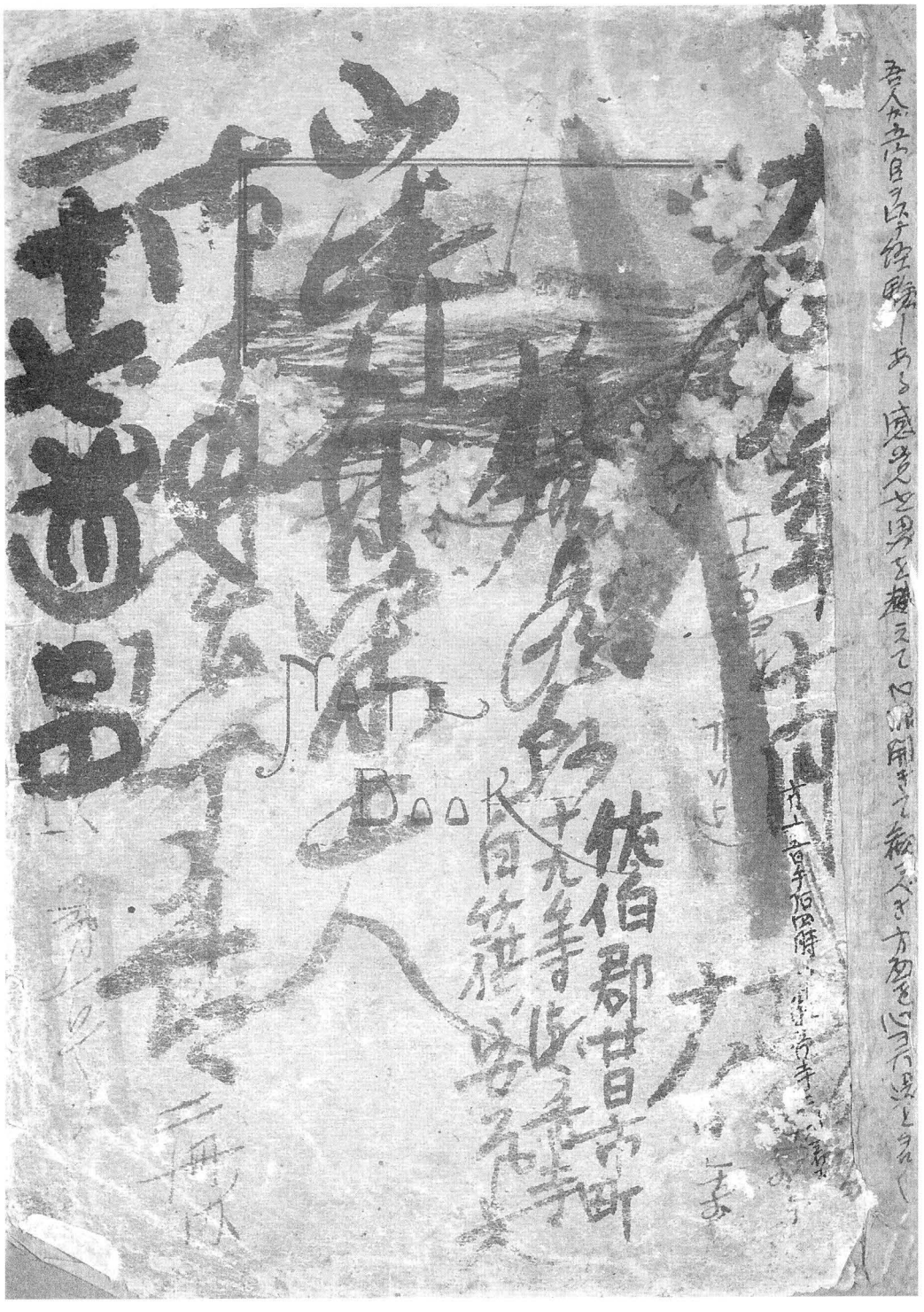
口根

月　日

初メ只口ニ斗リ有世何ゝ多仏ト云フタトテ血ニナラズ　他ノ者ヲ貴テ
(北ヌガ)食ベルト肉化シテ血トナリ治キテ来ル　如来ノ患ニテ喪ケ
心ニ入ル者ハ治キテ来ル　新物ナリテ来ル　山家デモ火ノ付ヒ口ハ治節
ハナイ　ハナバ熱クナリ湯ヲ沸カス等ノ諸種ヲ節ナス　火ガ治キ
テ居ル　燃ガ治キテ居ルガ云フニ一志一致シテ始メテ治節
ナサズル　信仰セ如来ヲ出ヘルガ肝セノ心ニ在リ即チ火ガハイテ
治節シテ来ル　凡テ高ハ体胞ノ光ヲ満月ノ如ク心中ニ写テ
御シテ云フ記セシ深キ云フ時　光紅出観ト法相取縁
ミエテノウルフレキ姿アリ　如来
如ニ喪リシハ鬼嫉リ　大キク喪クシ大キクカレシテナル　天地ハ大


NOTE BOOK

此事ノ法品（三十七道品）十乗ノ道諦ニ所レ説能ク實ノ摩訶衍
衍ノ法ノ為也 大論ニ云ク問テ曰ク三十七品ハ是レ声聞辟支仏ノ道
六波羅蜜ハ是レ菩薩ノ道ナリ何ヲ以ノ故ニ於テ菩薩摩訶衍ノ中ニ
説ク声聞ノ法ヲ 答 菩薩ハ応ニ学ス一切ノ善法ヲ一切ノ道ヲ
乃至復タ次ニ何ノ処ニ説ク三十七道品ヲ但是レ声聞辟支仏ノ法ニシテ非ト
菩薩ノ道ニ 是ノ般若波羅蜜摩訶衍品ノ中ニ仏説ク四念
処乃至八正道ヲ 是摩訶衍。三蔵ノ中ニ亦説ク三十七品ヲ独リ
是レ小乗ノ法ト 仏以テ大悲ヲ故ニ説テ三十七品ヲ涅槃ノ道ト随テ衆生ノ
因縁ニ各得ト仏道ヲ 今ハ乃チ約シテ大乗ニ詮理ヲ故ニ曰ク甚深ト[illegible]
曰ニ妙法ノ道也十余ノ広法随所ニ歎聞セアトセル無不至道場 故ニ云ニ無量ト
也 是ノ故ニ渉ニ云或ハ説ニ五根七覚ヲ或ハ説ニ八聖道ヲ門乃至



写真説明

弁栄上人　正面中央
（上から二列目、右より七人目）

笹本戒浄上人
（向かって聖者の左側）

佐々木爲興上人
（丹波師より向かって斜め右背）

丹波円浄師
（向かって聖者の右側）

橋爪実誠師
（向かって笹本上人の一人置いて左側）

荒巻くめ女
（最前列向かって右より四人目）

前書

田中木叉上人著「日本の光」（辨栄上人　光明主義）の大正八年の項に、―つづいて十月十六日より二十日まで、広島に近き廿日市潮音寺にて、之には中国では熊野・藤本・中山諸師、九州からは丹波・橘爪諸師を始めとして「聖母」と綽名された荒巻くめ老媼も参加した。それに上人は、わざわざ関東より笹本師まで呼び寄せられ、念仏三十七道品につき御話下されて頗る緊張した別行であった。と記載されています。それ程に斯の念仏三十七道品の御講話が如何に意義深いものであったということが窺われます。本年はまた聖者八十回忌の御祥当、聖者導きの御意を体し、茲に再度、三十七道品御講演聽書を披露し、念仏三昧成就いたされ、み佛と倶なる光明生活の稔りをお挙げ下さらんことを心から祈念いたします。

橘爪勇哲

弁栄上人広島県佐伯郡廿日市町潮音寺に於ける

念佛三十七道品御講演聴書の写

橋爪実誠上人大正八年十月十六日より二十日迄広島県佐伯郡廿日市町潮音寺に於いて山崎弁栄上人御勧化聞書（昭和十七年五月廿四日西林寺に於いて橋爪上人と読合せ校正す。）

（丹波圓浄）

初日　十月十六日

講題　念佛道諦三十七道品

○至心に皈命すの事

如来蔵　母
萬物生ず　胎蔵界

法身
如来の軌持に従て行はるは、日月星辰悉く宇宙の軌道に従へば是れ父の命に従うに似たり。

法身仏は一面は母たり一面は父たり。

吾人、万物の生じて人間が同じ五官にて五覚を違わず而も万人は万人面色を異にして、指紋の如き、何億万人も異にし世界中の者悉く古来生れて同人なく、如来は実に無尽蔵なり。同じき処は同じき如く、異なるものは異なる如く食物の如き種々の形に。

法身如来蔵は不可思議なり。人間の如きアミーバーが次第に進化して、人間の如くなる形の上に、地球上人間として生れ有難いものである。人間の

日々生き得らるゝ事は当り前と思うて居るけれども、知識の進まざるものにはわからない。実は如来の摂理即ち法身の力により万物生存す而も何の為に活かされているか、それがわからぬから如来が人間に応じて釈尊が出世ましますのである。

應身は、報身阿弥陀仏の慈光を教へ示し給う。摂取摂化せられる御仏の如来法身より生れたる卵がおさめ取らるゝ変化する化に、変化と生化とあり、如来の光に摂化せらるゝ熱心なる信仏の心が、如来の心に入って行くと進むのである。如来と我心と感応することになる。

○至心に勧請すの事

如来より即仏眼より見れば菩薩と極楽との差別なく、唯七宝の荘厳功徳充ち満てり。我等の心は生みたての卵にてボンヤリしている。但しボンヤリしての中にも若々しさがあって畜生・餓鬼等は人間以下にボンヤリしている。人間は阿頼耶識の中の仏性は進んでいるから、虫ケラよりも立派な天地を見ている。人間以上に進む時、十方三世に透き通る様になるから転識得智して識は智となる。即ち仏智見を開き四大智慧現はれて仏身仏土（七宝）の荘厳浄土と見る。人間も種類が色々と各々其の業識に従て見る故に、その見る処を異にして人間は餓鬼を見ず、之は即ちその信仰による。信仰により報身の弥陀如来を見奉る。如来光明により信仰心次第に開発増上されて来る。人間も教育により智識が発達する如く、本来法身より生まれし仏性も信仰によりて初めて活動して来る云云。仕方なしに天に任する位に天命に従うのではつまらぬ。如来に帰命して心身を捧げて如来の命の

まゝに、天に任ずることに依て活き甲斐があるのである。然る時我は仏心仏行となる。我は如来のものとなる。既に一致してしまう。母から産みおとしてもらって乳で育っているから身体は親の物である如く、如来より生れて如来の慈悲に育てらるゝから、凡てが如来の物であるから如来様に帰命するのである。心身を捧げるのである。

○至心に勧請すの事

如来のこの分身を我心に勧請する仏壇に、本尊如来を招き安置する如く、我心に如来を勧請し安置するのである。吾人の尊崇性を開発する。而して慈愛性を開発する即ち如来を尊び如来を愛慕する。之は信仰心の進むに従って此の性は次第に発達する、即ち敬愛相具わる此の二者具足して完全を得る。尊敬する時は次第に隔たって上下の差を生ず。然るに愛楽（あいぎょう）する時には尊敬する隔たりもなく人を親しく愛し慕い少しも離れたくない、一刻も忘れられぬ恋しさを生ずるが愛楽する事である。即ち尊崇性と希望性とが発動開発される。如来の霊徳を我が心念に胎（やど）すことゝなる即分身如来を請じて、然る時は神聖正義等の心を発動する様になる。親が非常に宗教を求めた其子は遺伝的に霊枢性が発達し受けるのである。信仰を暫く骨折り、一生懸命に心を活かす時は其処が発達する。吾人の筋肉は使用する処が発達する如く、念仏を至心不断にする時は信心の花は栄え開くこととなり、即ち其の分が発達して後には其処を使用せねば心持が悪い様になる。一家に主人、一国に王、天に日ある如く吾人の心宮にも王たり主人たり月たるの如来を安置すべきなり。宮が

あっても神がなければ形ばかりで、宮のこころなく本堂が如何に大にして美しくあるとも如来様がなければ何にもならぬ如く、吾人の此の心宮に如来を勧請すべきである。

宇宙の本尊、本堂の本尊、心中の本尊、不一不異水月の如し。

宇宙全体は蓮華蔵世界で其の中央に法身如来ましますが如く本堂もまた之に依って本尊の安置がいる。我等の心の世界にも如来様を勧請して安置する浄土の如来様と、我れ今勧請せる心宮の内の如来とは不一不異、空中の月と心中の月との如し。この本尊様が我が心に出来た時、信仰が出来たのである。然る時常に仏と常住三昧で是れこそ真の信仰で、我が信仰、我が本尊如来たることを得、

• 若し本尊を寺の本堂や家の仏壇に置くのでは信仰になっておらぬ。自分の如来ではない。釈尊入滅の時の遺教経のお示しの如く、其の心中の如来常住にして汝等を指導して世を輝く日月の如し、我世に住すると異なけれ云云。彼の開眼供養も勧請も同じ、本尊も開眼せねば駄目である。即ち五分法身是れなり。

関西の一婦人、信仰を出来ざるを愁う時、上人は、あなたは本尊様を持たないでしょう、招待して居ないでしょう。否也、五十円の仏壇があるくらいだから本尊様もあります、と。それは其処のあなたの仏壇にあるので、あなたの心に安置してないでしょう。仏壇は手本である。手本の通りに心にあらねばならぬ、文字の手本も手本の通り既に覚えて初めて活用する事が出来る。手本に書いてありますから—と任せては何にもならぬ。

鎮西上人念仏には念仏する毎に一度見参をすると云われた通りに念々に仏と見参するのであるから云々。其後数ヶ月の後、上人の許に来るうちに顔色が変っているから、貴女は本尊様が出来たじゃないですか云云。

昨日まで鬼の住みにし胸殿も
今日弥陀尊のお堂とこそなれ

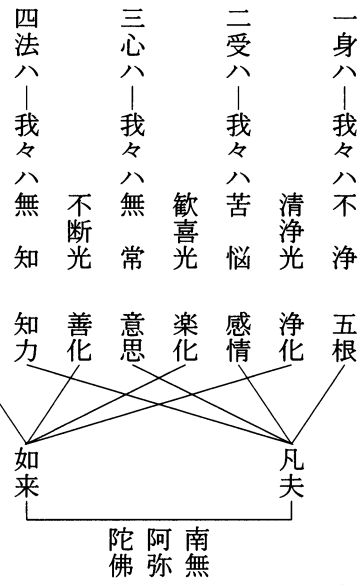
人が如何なる事をするも当方の心に煩悩さえ無ければ怒ることも腹立つこともない筈である。俗に疑心暗鬼を生ずるわけである。吾人の胸の内は煩悩の鬼を退治せず同居して暮らし通しだから、自ら苦悶して鬼と共に地獄に落ちるのである。

地獄とは鬼の住みける国なれば
鬼と一緒に住めば地獄よ
清き心で念仏すれば白蓮華を以て仏を供養するのである。我等は仮りの本堂本尊様に供養するのにキタナイ物を供養すれば勿体なく罰をかうむると云う。掃除が届かねば済まぬと思うのに我れが宮の本尊様に日々煩悩、妄念、不清浄の心を起して悪食を供養する事は未だ如来を安置せる心なき故である。即ち信仰の未だしの実証である。然し日々に念仏すれば清浄となる。さすれば、日々の仏の導きにより日暮しが出来る。我が心宮に安置し招待するは如来は我がもの、即ち親の物は我物であるから親の心に導かれて生きぬくのである即ち其尊き導師となって頂くのである。

第二日　十月十七日　朝席

念仏道諦七科三十七道品

四念処（七科の第一）



衆生心身垢質解脱

宗教の要

弥陀の心光に同化

宗教の能

宝石は磨かざれば光を成さず。瓦の如き下等のものは其の要なし。貴金石のみ益々磨く必要がある。人間も高等動物程磨く必要があるのである。牛馬が別時念仏も出来ねば、行じても進みはせぬが、人間は仏智見を開発する様になる。道に従って行けば、村、国、其道に従って郡役所又は県庁、王城にも至る。今、念仏も其の道諦に従って行けば必ず念仏三昧に入り、仏智見を生ずるものなり。三十七の道品は即ち念仏の道品である。之によって弥陀宝王の許に至るのである。

一、身　人の身体は如何に美しくとも洗う時、垢が出る如く、吾人の身垢は洗う時に先づ身に五根の垢を生ず。先天的の垢と後天的の垢とある如く、煙草や酒は衛生上有害であるが、最初に生れた時は、必要なかったのが、生活習慣により必要を生じて垢を造る。これが後天的である。先天的とは

吾人は本来磨くべき仏性の玉を持って居るが、又、本来垢をつけて粕を以て生れて居るから之を洗い、これを捨てねばならぬ。不浄なる五根を浄化する時は、清浄に、きよらかに徹透して如来の清浄光に輝くのである。心が清浄光に浄化さるゝから五根が奇麗となる。禅家に云う八面玲瓏の処である。

二、受は心の作用で喜・怒・哀・楽の情。

人間の情楽は、生れた儘は粕垢を持っている。人間、二十才前後には何となく煩悶することがある。また人間は取越苦労する性を持っている。これが生れながらの四苦又は八苦の苦悩を持っていることである。生苦（病い共）壊苦（楽が破れる時、酒がさめる時）歓楽極まって悲哀を生ずるが如きである。

心中に本来苦となる垢があるのに外から、金や衣裳ばかりで取り除こうとするから望を達することが出来ないのである。歓喜妙楽となり平和となって来る歓喜光の力で楽化するのである。

三、心　無常は消極的に言い現わしたもので、積極的に云う時には不断である。人間の心は常住の活動、不断に進転活動して居るのである。然るに人間が自分の心を当てにしている時は、自分は常に転ずるものだから方向を変転しているのである。念仏をしていても、何時の間にか外の事を思っている。されば自分の心の信心だけを当にしていると道を外してしまう。即ち無常なる故に何処かに往くのである。故に如来は不断不変の故に如来を基として心を如来の不断光に洗わせてもらい、如来を当にして置くと方向を誤らぬのである。吾人

の意志は肉慾我慾より出るものであるから罪悪である。だから仏の不断光の力で此の意志浮弱な悪心を善化させてもらうのである。このようにして仏の道を歩かせて貰うのである。

四、法　真の悟を得たるもの。即ち智慧であるが人間の知力は真実の知慧ではない。されば人間は死ねば霊魂が死ぬと云い不死とも云うが、共に断常の二見に堕している。即ち我見より立って物を判断分別するから皆が標準、出発点を誤っている。先づ、我見たるや、五蘊仮和合の法の上に我を立てる故に我見を無くして、初めて仏智見より顕われたる智見を正見となすのである。南無阿弥陀仏と念じて而して後、湧いて来る智慧が真正の智恵である。凡夫が自ら悟った気で成った仏は、先きに悟ったようでも、逆境に遇う時は忽にして光の悟りは逃げてしまうのである。念仏だけを申しておれば自然と仏智見を開くので、何も学を知らぬでも一心に念仏する時に真に悟った人と同等の悟りを開くことになるのである。徳本行者の如き然りで、是のようにして念仏の道を辿れば、必ず仏智見を開き真理契合すれば無我となり、弥陀の光明界に生活して無我の境となるのである。

米の生育は大部分の九十七パーセントは太陽の力で、あとの三パーセントが人の力である。

太陽に向って、

○暗くて困るから明るくしてもらわねばならぬ
　―南無阿弥陀仏。
○寒くて困るから暖かにして貰わねばならぬから―南無阿弥陀仏。
○米を育てゝ下さらねば困る―南無阿弥陀仏。

同じ太陽に向っても求め方は色々と変るが道程たることは変らぬ。米の草でも、芽生・少し大きくなる時・秋の稔・と姿形は変っているが米の草であることは同一であって、即ち一の道程であるから進み方の差だけである。この四念処も三十七ケ道品も同じである。

念仏に変りはないが其の道程たることは同一であって其の間の階段があるのである。念仏も一心専念であるけれども別（わく）れば、清浄光仏、歓喜光仏、智慧光仏となる。（感情・意志・智慧の三となる）

信機　不浄・苦悩・無常・無知と信ず。

信法　清浄光・歓喜光・不断光・智慧光を信ず。真実なりと信忍する。次に念ずる。信は認め、念は実地に念じて解信するのである。

四念を統一したる、

客体　人格の弥陀

主体　人の信念

名号　聖種子（信念の素養の要素）

（冠註）

人間が自分の事は自分でわかると思っているが、実はわからぬ。法無智なる故に如来の智慧光によりわかるのである。

大欲起らば小欲去る。

我を捨て如来に救われんとの欲。太陽出て、小星隠る。心の置き処が変化するからである。

仁者無敵

光明生活（慈悲の目に憎しと思う者無し）

暗黒生活　敵国人の欠点ばかりを見る。

第二日　十月十七日　昼席

念仏道諦七科三十七道品

四如意　又は　**四神足**　（七科の第二）

欲　　欲望

欣　　楽

心　　一心

慧　　巧慧

吾人の精神なる玉は磨く要あり。其の垢を洗い除くべく出来ている云々―。之が宗教の要素である。精神の奥には人格の極底、尊体たる霊格がある。之を現わすべきである。

由来、宗教は感情を元とすれども、それは偏狭にして完全を欠ぐ。或る宗教は悟りに偏するし、或は有難しと思うばかり、又或は、道徳を以て宗教とするあり、皆一方に偏するは完全なる宗教にあらず、三方面均等に発達するを始めて真の完全なる宗教となす。

而らば如何に進み行くやと云うに、四念処の法による。しかも其の四念処に統一せられたる方は客体なる阿弥陀仏である。

吾人の信仰の対象たる人格なる弥陀に依りて清浄光、歓喜光、智慧光、不断光の光は皆、如来が持っておられる。吾人が之を信じ、之を心に受くるのが人の信念で之により吾人の心を統一してしまう。

念仏して一心一向に念ずる時、精神は不断、清浄等の四念も一念に統一される。之を分析すれば四念処となる。吾人の滋養品を食べて、何故に吾人に滋養となるやというには之を分析せねばわか

らぬ。然し之が活動するには、統一せねばならぬ。

今、如来の四念処も分析して其効の理由を知るとも、実際活動せしむるには四念を統一して一心一向に念仏する処に活力を生ず。吾人の五感は別々に働かす目も鼻も口も一致して人間の作用をなすが如し、されば、南無阿弥陀仏の一体に帰依信仰す。然るに始めは仏は欣慕する様にならぬから之を起さしむる素養を要す。其の要素を四神足と云う。

一、慾　とは如来に対して一心に欲望を生ず。人も然り、欲なくば車は牽かぬ。金が欲しいから苦んで車を牽く。唯、欲に浅深、大小、高低があるだけ、小供の欲や猫犬の欲は低く、人間も成長するに従って欲も進んで来る。動物欲より知識欲を生ず。知識欲の生ぜざるものには法を説き教育をなすも無駄である。

カイゼルは国民を犠牲として国を欲し、釈迦は国を捨て、精神的国王となる。広大なる欲望を有せらるゝのである。吾人も説教により宗教欲を生ず。宗祖釈尊等皆しかり。宗祖も始めは知識欲により悟道に入らんとして能わず、弥陀の信仰を以て、初めて其望みを起し其望みを達し玉うたのである。

二、欣　欣求　感情的に何となく甘（うま）味を生じ願楽（ぎよう）の心を生ずる。如来は麗わしい円満なる人。慕わしく懐しく恋しい人であると思う。経中に弥陀の相好を讃嘆するを見れば、其の人を思いたくまた会いたくなる。一切の諸仏も力を尽して弥陀を讃嘆せられたり。吾人が人を賞むる時は、其人を偉い人と思い会い

度く思うようになる。

されば、人をして欣慕せしむるの教門は且（しばらく）浅近（せんごん）なるに似たれども自然悟道の密意は極めて是れ深奥なり。と宗祖は申された、情の糸を以て衆生の心を弥陀に繋ぐのである。されば常に讃嘆して、あるは慕う心を生ぜしむるためである。

三、心　一心、二兎を追うものは一兎を得ず―だから一心一向にする。さすれば事として弁ぜずと云うことなし。念仏により救わるゝ外、他に途なしと一向に信ずる之を実際にやっていると益々心が増進する、一心の強くなるとき知慧はなくとも成功する。

四、慧　巧慧　人間の心は志す方に知恵づくものである。吾人が一心に如来を信仰して念じておると、自ら如来に会い如来を増々愛慕する心に巧なる工夫を生ずる事が出来る。

兆殿司和尚が小僧の時、涙を以て不動（明王）を画くが如き、之は天性に画の知慧に秀いでたるも、外の事は下手である。自分の常に念ずる処には巧慧を生ず。阿波の介は数珠を作るが如き、されば一心に念仏して信仰進むに従って信心の芽ばえを生ず。弥陀の法乳を常にふくみある時は心眼が開けて来る。四神足とはこの念仏の教を能く聞いておると別行念仏においても念仏神足となりて速に進むことを得るのである。

人間が生長するに最初は親の乳の力によらざれば養う事能わず、そも〳〵天地宇宙の中に、万物みな如来の説法の恵なれども直接に自ら之を味い我が滋養とする事が出来ぬから、弥陀仏の本願の

乳によりて育てゝ貰わねばならぬ。信仰が出来て来れば小供三・四才までに堅き米飯を喰うことを得て人間となる事を得る如く、自ら信仰生活は独立し得ることゝなる。

真言では弘法大師を信ずることは大師心中の内容の花を見念すべきなり。空海の心の奥に咲く花は弥陀より外に知る人ぞなき—と云われるは、空海の入定の時は妙観察智の弥陀如来を念じて生るゝのである。金庫は中の金が必要で、入れ物たる大師は必要ではない。身体は価値はなく、其の内容的要素が、之が倣うべく信ずべきところである。念仏中にも金銀銅鉄の差別あり。金の念仏は最初の程は滅多に出なく時々に出る。されば一向に相続修養を積む内に次第に一心の念仏を相続するに至る。

念仏は一人の心ではない二人の心である。如来と我と二人の心を念仏とす。炭俵の中の炭は黒き炭であるが火鉢にある時は火と共になれば赤くなる。赤くなれば湯を沸かすようになる。炭と火と一所になったから活き働きを得る。吾人の煩悩妄念の炭も、如来の火が着くと何となく有難く暖く燃えて来る。之が念仏心である。如来と一処に吾が心がなるから生き活らいて来るのである。而して火のつくに炭の中に火を一個置いて風を与うる時炭に火は燃えつく。団扇であおぐと燃えたつ。今別時にも如来の火を吾人の煩悩の炭に念仏の団扇を以てあおぎつくるのである。燃えついても無意味に燃やしても駄目である。小供に命じて火をあおげと云った処で、火が既に消えているのに小供は依然とあおいでいる。それでは何時迄も扇い

でも駄目である。如来の火を消さず燃え立つように扇がねば駄目である云云。如来の火は衆生の煩悩の炭なくば火の燃ゆる事は出来ぬ。如来の慈光は煩悩の暗ある故に顕現して作用あり。この火を燃しつくるに、巧慧ある人は上手に燃しつける。下手な人は消してしまう。欲、欣の間は尚炭がしめっているのである。

第三日　十月十八日　朝

念仏道諦七科三十七道品（第一席）

四　正　勤（七科の第三）

一　未生善令生　仏性（開発―形式）

二　未生悪令不生

三　已生善令増　煩悩（解脱―内容／霊化―実質）

四　已生悪令断

如来の手引きに預り如来指導の下に如来の光中に入り、真・善・美の極楽に到達する即ち心が浄土に生るゝ如来心中に入り、乃ち如来のお思召に契わざる心を取り除き、契う心のみを増上してもらうが（娑婆は凡夫の心が感じた世界は此界である）浄土は即ち仏智の顕現である。吾人は今のまゝの心では十万億土に往っても、即ち現在業感の心だけなれば極楽に往く事は出来ぬが、萬徳円満の如来の力に依り意を一心に進めてもらえば、身は娑婆にあるも心は一分一分浄土に生まる即ち如来に慈育して戴くのである。されば如何にすれば如来の子供となるか、如来の心が育つかと云うこと

について四正勤（しようごん）がある。其の心得や方法を誤れば無益となる。米を蒔かずして如何に肥料しても草のみを生ず。されば米に成るものを育てゝ雑草を取除いていくのが四正勤である。

如来より見れば吾人は如何に考えても仏と成る事は能わぬ。如来より仏に成る種を蒔いて貰らうのである。我見我愛の心を如何に増上するも、前身と同じ煩悩の苦果を招くのみである。之を如来より取除いて戴く而も如来の種子のお育てを戴く、只如来を一心に念じて如来より引出して貰う（即ち引出しの仏性）、悪縁悪境にあれば之と反対に地獄、餓鬼の心が引出されて共に熟果を受く。稗（ヒエ）と米とは早くより分けて米のみを育つべきなり。幼少の時は判別出来難い、稗を育てゝも米とは成らぬ云云。

人間は法身より受けし先天的仏性を有す。然れども之を開発せざれば其の用果をなさず、故に教を聞き念仏して吾が本心の仏性が開ける、然る時は善悪分別の了智を生ず。人欲―肉体の欲（生理衝動、活き度いという心）あるが故に何れを食いとるか、又一方には自分より強いものが居ればそれに食われまいとしているが、動物も人間も同様である。人間も生きるために衣食住が入用、また自分を防衛するのに弓矢鉄砲の用意をする、然る時、敵より弱い時は恐怖を抱く。然るに此の煩悩を美化し解脱する、煩悩を其儘に霊化するのが大乗仏教（小乗教はこれを断滅する）である。柿の甘味、渋味深さ程甘くなる、煩悩のある程能々甘くなる、大欲の煩悩は霊化され、一切衆生を助け度いと云う大欲に霊化す、四弘誓願の如き大欲心

を生ず、仏に成りたい欲を生ず、かくの如き実質を生ず。内容の実質充実する即ち栗の中実が熟すれば自らイガを破って出る。而る時は煩悩のイガを解脱してしまう。念仏を至心不断にしていると煩悩のイガは自ら起こらぬ様になる、煩悩は仏になればいらぬ、如来の光に中実成熟すれば、外の煩悩のイガは不用であるから脱け出るのである。

未生の悪は令不生は煩悩の草を生（はや）させぬを云う。然るに又一方では此の煩悩の草を米（稲）の根に伏せておけば却てこれが肥料となるが如く、我等が心に煩悩があるのは肥料になる如く、其の心は仏と成る迄の肥料（かて）となるので、実の如来のお思召は不思議なる計らいである。天地間一つとして無駄なきものは与えられてはおらぬ、草の為めに米は益々肥料を得て成長するが如きである。

吾人が如来を疑うのは、如来と我との中間に隙間があるから煩悩の悪魔はその中を隔つるのである。人間―友人と互に相往来して親しき時は他人が中傷しても耳をかさぬが暫く遠ざかりおる時、他人が其の中間に中傷する時は疑い生じ他を怒り又怨むことゝなるが如し。我等は如来と常に接近すべきなり。（親縁・近縁・増上縁の処）

第三日　大正八年十月十八日　朝

念仏道諦七科三十七道品（第二席）

四　正　勤

一　未生善令生

二　未生悪令不生

三　已生善令増

四　已生悪令断

仏性　開発―形式

煩悩（解脱―内容／霊化―実質）

自我（自力）一切悪の首領

善悪の標準は何より来るかと云うに、儒教は道心（善）私欲人欲（悪）と云うている。吾人の心に四つの悪がある（染汚）・（苦）・（無智）・（罪悪）。人間に心がなければ悪はない。心があるから悪がある。その悪は以上の四つを以て代表している。

如来は万善万徳総持の人格である。清浄・歓喜・知慧・不断（正善）である。即ち如来は一切善の代表者である。我等は常に太陽に向えば常に光明なれども、太陽に背けば常に暗黒なり。暗黒裡に凡ての魔を生ず。光明中に悪魔来らず生ぜずである。

弥陀の万徳を表する三徳

神聖／智慧／正義／実行（父）

恩寵―慈悲（母）

吾人は信心の種子を蒔いたならば、花開き実稔の迄は勤めを要す。もとより種子は実るまでその性分を有す。仏となる心を育て下さるのは如来であるが、それに三徳あり右図の如し。信仰の目が開く時は如来の父在しますことを信じ、厳然として父は之を誡め玉うと知るが故に小供は腕白を控える。吾人如来の父を信ずる時は神聖正義を勤め

る。父は目の如し、されば遠慮ありて之を誡む。母は慈悲の故に愛育す。然し厳なるのみにて愛なければ窮屈であり、故に母の如き慈悲が懐しくなる。かゝる親の心に契うて育って行く姿が四正勤となる。之に背き父母の意に契わざる行為が増上すれば仏となることは出来ぬ。

(1)神聖　道徳秩序の本源

(2)正義　心理不可侵

法爾の徳相

天の星が天系の軌道に背かず運行しつゝある如く、吾人の行為に宇宙間の法爾真理の基準に順ずべき道がある。国道を往けば必ず帝都に着くが如し。火は焼き水は低きにつくが如く、耳は聞き鼻は嗅ぎ眼は見る、これ天然自然の規則である。人間の定めなどは時と処に於いて変わり、また人間によって変わるものである。天皇は神聖にして侵すべからずと云うのもあてにならず、過激派発することあるが如きである。斯の神聖なる天地自然の道が道徳の本源である。即ち如来は宇宙道徳の太陽である。之を見る眼の開かずば其の偉大なる陽を見ること能わず。されば之を見るものが正見（正知見）である。（儒教等はこれを良心又は良智と云う）。自分の都合が善いからと云っても道徳の標準とはならぬ。阿耨多羅三藐三菩提（あのくたらさんみやくさんぼだい）に至るのが本、全宇宙の大道を行くものであり、これ、この道を照すものは如来の光明である。

第三日　大正八年十月十八日　朝

念仏道諦七科三十七道品　（第三席）

子供の幼稚なる時は道を歩いても危険を承知しないが、信仰の目が見えて正見となる時、その危険なることをも知ることが出来るのである。然るに凡そ智慧には認識の智慧と実行の智慧がある。如来神聖の智慧は道徳を照す智慧又は正見である。

正義は実行の足である。即ち遠慮なく破って益々進んで行くのである。仏法に八正道と云う言葉がある。仏法は凡て正義である。戒行は仏の通りにすれば正義。之を違えば邪である。仏に進むのは凡て正義である。神聖の光明によって正見の知を生じ、正に進み邪悪を捨つることが出来る。如来の極楽は二百一十億土の所に有り、不正と悪なる粗末なものを捨て、すべて正義を取り給う。

如来は何処までも捨悪摂善であるから極楽清浄界である。正義界である。清濁併せ呑むのではない、極楽ばかりを取り、我々衆生の心をも撰択し給うて今現に実行し給いつゝある。本願第十八の三心不具の者は、常に如来より振るい落されている。これが撰択本願である。如来のふるいは常々我等の心を唐箕でふるわれているのである。要するに神聖なる眼を開き、正義の道を踏み行くものは如来の道、正義の路である。

恩寵は前述の如くに云へば非常に厳粛にしてむつかしいようである。凡そ人間が育てらるゝには母に先づ育てられ而して後に父に育てらるゝのである。恩寵は母の徳なる故に先づ先となる。即ち清浄、歓喜、智慧、不断の光に育てられたこと、何づれも知らぬ者が、只一心に如来に帰命して唯

頼るが如くに信じて念仏する時、自然と如来の慈母に育てられて目が開いて来る。而して目が見えて来れば智慧眼を開かれて父の育てに預ることになる。如来と衆生との育ち方は人間のそれと同じである。母の育てに預り自然と正見に至る。正見の眼開く故に倒れる事がない様になり、自ら如来の大道を安然として行く、遂に正義は解脱となる。斯く如くして衆生より仏覚迄に四正勤を修し進むのである。

第三日　大正八年十月十八日　午後

念仏道諦七科三十七道品（第四席）

五根と五力（七科の第四）

一　信根
二　精進
三　念根
四　定根
五　慧根

滅諦の三階

一　喚起位―資　糧　位　五正行（下種）
二　開発位〈加行位―因／見　道―果〉七覚支（華）
体現位〈修　道―因／無学道―果〉八正道（結実）人格

如来の念仏の道にしても、順序には道（どう）と云うものがある。国道・県道・郡道・村道・里道と皆其の中央に至る道がある。このように心の道にも六道がある。即ち業道の道がある。心を本

として心の向き様に三善道・三悪道がある。各々自らの業を積んで其の果に達するのである。業に依って進んで行った処を道と云う。これに心の芽生え、花の咲く時、実を結ぶ時と順次に進んで行くのである。

世間の人は地獄を知らぬから、そんな処へは往かぬと云うが、自ら三悪道の業をなせば其の業に引かれて地獄等の処に必ず往くのである。が、今日犯して直に往くのではない。次第に業の種が芽生えて、花が咲き、そして、熟果を受くるのである。凡て種子には生産起原の作用を持っているのである。即ち業事成弁（ごうじじょうべん）するのである。凡て種子には生産起原の作用を持っているのである（業事成弁）人間は自体は枯れても第八阿羅耶識（アラヤ）にはしっかりと生産起原の作用ある種子が成就しているから、死ねば直に其の種子に依って次の生を受けるのである。人間も生まれたまゝでは動物的で終るが、人間は精神を開発して進んで行くように出来ているから、人格は発達するのである。けれども下向して動物的な慾のみ発達するときは三悪道に往くのである。

いま、念仏を申して仏果に至る間の道諦に階級を付けて見ると、植物の種子が蒔かれたそのものには階級を云々するものではないが、其れを外より分けて見ると三階がある。

一　喚起位　念仏の教を聞いても如来の光明と云うことは判らぬが、申していると自然に種子が芽生えて来る。念仏を申しておる間に信心を喚起する。之を喚起位と云い、種子を養う元手（もとで）を得たのである。食糧を食べているのである。胎

内の子が宿り次第に肥えて来るのである。

第三日　大正八年十月十八日　午後

念仏道諦七科三十七道品（第五席）

五根と五力（七科の第五）

一　信根　〃力
二　精進根　〃力
三　念根　〃力
四　定根　〃力
五　慧根　〃力

滅諦の三階

一　喚起位―資糧位　五種正行（下種）

小さなものではなく、大いなる如来に抱かれているので、已に如来実在を立証しているのである。肺病患者が私には酸素が効くと云われるが、酸素は一体どんなものでしょうか?私は未だそれを吸うたことはありませんが…と云うようなものです。これは日々常々酸素を吸うているのであるが、本人はこれを知らないと云うのである。如来の実在も、我は如来に依り実在するのであるが之に気が付かぬだけで、芽生えと根の出る時とは同時である。二ツ葉を生じた時にすでに根が生じているのである。吾人も胎内に在る内は五根の作用はないが、胎内から出れば直に五根の作用を生ずるのである。

(1)　信根　如来の実在を信ずるのが信根である。そして之によって精進が生じて来るのである。道路でも此の道は必ず停車場へ行くと確信をしてい

るから其の道を走って行かれるのであって、若し其道が果たして駅に達するや否やを疑う時は精進は出来ないのである。

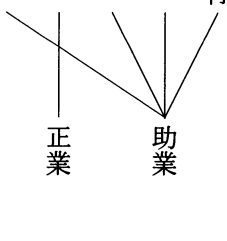
既に進んで行く時、仏を念じて忘れられぬようになることは即ち如来を念ずる根が生じているのである。念仏をしていると次第に自分の心が仏に留まるようになる。仏に入る—一心が仏に入る。而して亦進めば如来の智慧が生じて来る、即ち赤ん坊が生まれて漸く目がボンヤリと見えて来る（信心開発して生ずる本当の智慧ではない）。朧ろに見えて来る前（まで）は聞かせて貰ったものをもそのようなものであろうと思うが、今はそうでなく実際に見るのである。

根は養分をとって芽が成長するのである。又、根が張れば風に吹き倒されることもない。信仰も根強く出来ぬと他から誹り倒されるのである。

五力五根は潜勢力で五力は内面に今少しづつ、次第に発達して来る力である。五根により如来の滋養を吸い取る力が付いて来る。子供が乳を呑んで次第に肥大して力づいて来る—乳が消化されて自分の力となる。其の養いを受けることになるから資糧位を云うのである。

それでは如何なるものを食べるかと云えば、善導大師は五種正行を説かれたのである。

五正行　資糧位



第三日　大正八年十月十八日　午後

念仏道諦七科三十七道品（第六席）

五根と五力

五種正行（資料位）

礼拝正行　善導大師は金色の如来にお目にかゝる心持で礼拝すると次第に信心が発達して来るのである。（何にも無しに唯考えていては何ものを生じて来ないのである。）

読誦正行　経を読むこと。経は開導と申して、同じように経を読んでいても初めは其の意味がわからない。しかし、自分に少し信仰が出来て来るとだんだんわかって来るのである。三部経でも釈尊が実際に現在阿弥陀仏が在すのを見て説かれたのである。即ち釈尊実見の説であるから経説は多少なりとも釈尊の心に入った人でないと判らぬものである。初めは極楽の様もわからぬが、如来信仰の心が次第に開けると経を読む時は其れに依り開導されて経の如くに実際の天楽を聞くように活きて来るのである。米も白米は死んでいるが玄米は生きている。それに死んだ米でも人間が之を食する時は米の力によって人間は活動の力を持って生きて来るのである。経でも信仰心が出来れば活きて来るのである。吾人の胃の消化力が無い時は食べた米も血とも力ともならない。消化力があれば力となるのである。経も読んで消化力がある時は活きて来て実に極楽をみ（観）、音楽を聞くに至るのである。

観察正行　冥想観念、始めは、経の如く画の如くの想像が、教我思惟と成り、やがて教我正受と実

際に顕現して来るのである。

称名正行　之に三階あり

請求念仏

感謝念仏

咨嗟（シサ）念仏

称名が最も如来と直接にして近し。

世間では六字名号に所具万徳を含んでいるから之を呑みさえすれば良いという。これは真言の呪（じゅ）と同じ、浄土の念仏は如来の大悲本願力が加わるから貴いので、称える六字に効果があるのではなく、如来は見ているから我名を呼べと仰せらるゝのである。犬が来た時恐れて母を呼ぶのであるが、子供が母様と呼ぶ時は、母は常にそこに居て見ていて下さるのである。それと同じ様に如来常に其処にまします、来て下さるから有難いのである。如来の活ける力が加わる処に大利益があるのである。

讃嘆供養正行　実際に有難く偉いと思うから讃嘆するのである。美しいと思うから讃嘆するのである。讃嘆すると、善いと思う方に自分の心が似通うように、如来の方に似寄って来るのである。斯のようにして人間の心を如来の方に養うて往くのである。

助業　これは興奮剤ばかりでなく、やはり各々に養分となるのであるが、この中心となるものは称名である。親縁、近縁、増上縁の三つがある。助業より至る時は此方より如来に近寄るのであるが、称名は声に応じて如来より来り玉うのである。

真（経）・善・美（讃嘆）経では美を顕わすことは出来ぬ、讃嘆せねば美を顕わすことは出来ない

のである。

第三日　大正八年十月十八日　午後

念仏道諦七科三十七道品（第七席）

信を分析して

現在の我を染汚と信じて如来を感ずる、現在我の弱点を信じるから信仰の要を感ずるのである。如来を信ずるのは巧能ある故をもって信ずるのである。

如来の実在と実力を信ずるのは信の三位による。

一、仰信―釈尊・宗祖・歴代の上人は人を欺かざる人なる故を以て、如来の在しますことを信ず。

一、解信―如来の在しますことの解らぬのは如来と人間とは正反対のものであるから判らぬのである。我々は初は地球に依り之を信頼している。しかし世間は当てにならぬ。若し大根に心があるならば、育てられている時は喜んでいても最後には人間に喰われてしまうので有難くないことだろう。

天地の恵みによって人間は生育するものと考えているが地球は皆、最後には人間を喰うてしまうのである。このようにこの世界だけを当てにしているものは可愛想なものである。然し世界には絶対なる如来を信頼し釈尊等の教に従うて信じて往くものがある。これを解信と云う。

如来は不生不滅永遠のお方であるが、衆生は生死の中にある夢中の者。如来は醒めたるお方、夢中の者は醒めざる故に如来を知らず、先づ自

らを反省すべきである。この世の如き五十年八十年の極楽とは夢中にお金を拾うたのと同じことで効果はない。この世間の極楽では五十年ぐらいで終るから永遠に醒めたる極楽を求めざるべからずということである。されば醒めたるを仰信すべしである。解信に二つあり。

内部より入るものと外部より入るものとがある。内に宗乗を了解していく。外部よりの門外漢には科学哲学による説明をしてゆかねばならぬ。理論を通じて阿弥陀仏を信ぜしむるものを云う。但し理論ではみ仏が在る様にも無いようにも思われる事となる。

一、証信―実践すればこれが一番。確信が得られるのである。そして是れは説法を聞かぬ人も、自ら慧解を生ずるのである。

第三日　大正八年十月十八日　午後

念仏道諦七科三十七道品（第八席）

五　根

一、信　根

二、精進根

三、念　根

四、定　根

五、慧　根

五根の総説

信念修養の生理的及び心理的作用の根本、この根元が定まらざれば無益となる。吾人は生理作用を離れて心ばかりで活きるものに非ず、身体外形の形の備えから即ち生理的形式方面よりも信仰を起こすべき様にしてゆく、又、心の方より善い習

慣をつけて身体を養っていく、そうすれば如来の御思召に契うようになる。心身共に如来に充されて来る！如来のものとなる即ち全心全体、仏心仏行となって来るのである。

植物も根ある故に養分を吸収する。これを人間に比較する時に木や草と人間とは反対である。人間は物を食うに口は上の方にしてあるが、草木は下にある。草木は花は上に向って開く、吾人の花は心の内に開く。全く吾人の信仰が活きて、やがて果を結べば、之を人の心田に植付けんとする欲を生ずる。之が生活上の信仰。この信仰を育てるには根を要する。人間では口に食べて先づ歯で咀んで胃に送る。活きて行く十分の実果を得るには十分の資糧を与えねばならぬ。

如来の慈光は平等なれども、衆生の心の受け方に差別がある。田地は同じ一つでも、その作り方で米が八俵もあり十俵にもなる。我が往生の後も心の受け方によって九、九、八十一品の別がある。八俵、十俵と異なるのは培養法の如何によるのみである。念仏も沢山に申したからとて必しも善いというのではない。田地ばかり広くても培養法その宜しきを得なければ実果少なきが如しである。口で咀んだものを胃に送り腸に入れ之を吸収し養分を取る。粗は捨てる。身体中の機械の凡てが必要なものであるが病を得れば其の機能を発揮することが出来ずして病を生ず。今、五根の総てがまた必要であるが、病を得れば其の根の作用を欠ぐが故に滋養を完全に取る事が出来ぬ。それ故に五根を十分に練用せねばならぬのである。

第四日　大正八年十月十九日　午前

念仏道諦七科三十七道品（第一席）

信　根

人間が活きているのは、唯五感の欲ばかりを恣しまゝに使用して心を養うことを忘れている。吾人の本来仏性は、主人なれども幼君の為に肉我の欲に横領されつゝある。ために益々仏性が隠れて三悪道に堕落するのである。若し信念によって如来の自性が育てられる時は、肉我の欲は次第に去って煩悩は美化されて善臣となり、今までの逆臣は忠臣となるのである。天孫子、天の雅彦を遣して下界日本を説服せられたが、女に欺かれて便りが無いので更に経津主命、武甕槌の命、蒋に天降りし催促をされたから大国主命等皆降伏して忠臣となられた如く、煩悩の賊を如来の命に従うようになるのである。自分勝手の五根が、如来の命に従うて臣として仕事するようになり得るのは如来を信ずる事によりて初めて出来るのであり、これが信根である。信仰の幼君の芽を開いて来るのは即ち信根である。

精進根

信じて食べると、胃に入って身体中に廻わる間に勇猛精進となる食物も咀んで味が出る。そうして胃腸の働きが丈夫であると健康となる。即ち精進となる念仏を申すにも能く噛まねばならない。多数の念仏も丸呑では滋養とはならぬ。即ち働きの健全なるところは精進根である。

念　根

念根とは一心に仏を念ずることである。

定　根

食べたものは心臓の活らきで血となるように、定で一つになる。今までに食べたものが一つとなるように仏と我とが一致する。即ち食べた米でも肴でも同化して自分の血肉となり同化してしまう。

慧　根

慧とは以上の如くして出来た身体が活動するように南無阿弥陀仏を念じておれば其の念仏の結果、如来と一致して如来の心を以て活動していくのを云うのである。

第四日　大正八年十月十九日　午前

念仏道諦七科三十七道品（第二席）

如来と衆生との間は、衆生第一の信根がなかったならば如何に念仏の滋養を摂っても通じもしなければ消化もしない。歌道でも書道でも同じで凡ての事は精神一心にすれば垢は次第に除かれる。一心に念ずるの念根を完全とするとき、如来より享けよう〳〵とする活動が起こる。定は一致して如来のものが我物と一致する。

慧とは、今こゝは開発の慧とは違うが、何となしに如来の実際を信じて、知り得られて来る夜明け位の処である。ほのかに如来の相が現われる処、禅家は門より入るものは実の宝ではないと云うが、外から聞いて始めの内に、斯様なものだと

知った如来は本当の定（じょう）ではない。今の慧は内心よりほのかに得た慧であるから実際の活用が出来る。入れ智慧は、裏からともすれば剝ぐるが如きで本当の役には立たない。

生理的調節機関

神経系ホルモン

信仰問題もこれを調節する大必要がある。これがなければ生きられない。現在米価騰貴し調節問題が起きているのも其の関係である。調節が出来なければ社会も病み死んでしまう。

ホルモンとは内的分泌の化学的性分要素の覚である。血液が何処でも廻るから人間が活きているのである。この血の運びの外に神経またホルモンなるものが存在していて、凡てを活きさせているのである。ホルモンの力で色欲又は食欲を増上せしむるように、念仏を一心に申しそれが次第に進むと即ちホルモンが其の方に集って来るから益々念仏を申すように興奮させられ即ち、内面よりこれを奨励する力が集るのである。生理上の作用も心的活動にも伴いてホルモンが集注する様になるのである。

第四日　大正八年十月十九日　午后

念仏道諦七科三十七道品（第三席）

（七科の第六）

念仏三昧七覚支（覚分ともいう）

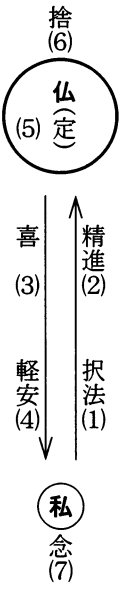
一　択法覚支

二　精進覚支

三　喜覚支
四　軽安覚支
五　定覚支
六　捨覚支
七　念覚支

初に口にばかり南無阿弥陀仏と云うたとて血とはならぬ、但し、お米を煮て（形は変り死ぬが）食べると消化して血となり活きて来るのである。如来の恵みをうけ、心に入る時はそれが活きて有難くなって来るのである。炭でも火が着かぬ間は活動はしない。着けば熱くなり湯を沸かす等の諸種の活動をなすのである。火が活きているか、炭が活きているかと云うと、これは二者一致して始めて活動を生ずるのである。

信仰も如来の光が衆生の心に入り、即ち火がついて活動して来るのである。釈尊は弥陀の光を満月の如く心中に受けて其の後、之を衆生に説き示し玉う時、光顔巍々諸根悦豫云々の麗わしき姿があるのである。如来の光明を少しく受ければ、少々嬉しく、大きく受ければ大きく嬉しくなるのである。天地に大小はないが暗闇の時は狭いが、光りが来れば世界は広くなるのである。如来は心の世界を照し給うのである。法然上人の相貌、人格の麗わしきは如来の光りを月の如くに受けて居られるから外姿も姿色清浄である。宗祖は其の内観の喜びを伝えんと念仏を勧め玉うたのである



が、我等之を知らず、また信ぜざる故に暗中常に煩悶しているのである。

七覚心の花開くは、人間では婚礼の状態である。宇宙に円満なる如来様がおいで下さる。念仏三昧とは衆生の心、血管には或るものを充たしてもらわねばならぬものがある。前の加行で仏の法を開き、念仏を申し、多分に養成され素要が出来ている。それは雲中の月の様で、さだかに月影は見えぬが彼の雲のあたりにあると思うている処に見道を進むのである。

第四日　大正八年十月十九日　午后

念仏道諦七科三十七道品（第四席）

別時念仏は加行に当り別時の実は見道である。この時に見仏するのである。

一、択法覚支

一定した方向に心を統一する、この消息―即ち三昧を等持定または直調と云う。吾人が心に広島と思えば広島に行き、宮島に行くと思えば宮島に行くのである。即ち心に目的があって一定した法を行うと、心は未だ今日迄はそこに無かったのであるけれども新たに其の方に一定するのである。如来様の方に一直線に心を調えて行くのを直調と云う。心が一定すると次第に心は統一されるのであるが、この時、雑念妄念が生じ来ることまた山の如くである。しかし一心に念仏することの経験なきものにはこの様子は解らない。これは日中は汽車の通る音に気が着かぬが夜分静かになると汽

車の音が喧ましく聞こえて来るのと同じである。

またこのような雑念妄念は簡択する（えりぬく）ことが出来るのであるが、これは只、簡択することの出来る一定した的があってこそ叶うものである。この故に如来様を的とし如来に向かって進まんために雑念妄念を簡択して心を統一するのである。一心一向に心を統一して入神するのは婦人の方が入り易く、理性発達した者が入り難いのである。即ち感情より入る方が早いのである。凡そ信仰なるものは自己の有限無力を信ずる時は入神し易く、自ら偉いと思う者は入り難いのである。定（じょう）に入るには音も統一されておればなを入り易いので、声と木魚の音も統一されなければならぬのである。

二、精進覚支

次に精進覚支は進む自分の実感上の覚えがついて来る—感じが出来て来るのである。その時は勇猛の念仏が進んで来る事がわかって、如来様に向かっているのである。けれども心鏡が曇っておれば映らぬから、其の時は念仏を一心勇猛に精進して心が磨けて来るのである。米でも糠が脱けて来るのと同じで、一心に勇猛に進んで来る感じ覚えがあるのである。

三、喜覚支

次いで喜びを生じて来る。この喜びは微妙なる感じで、これは定中の喜びであって心安らかになり、悦しくなる心中実感上の覚である。

四、軽安覚支

喜びの感じが進んで心平かになると軽安となる。たとえば、物を貰った時は心常に嬉しいが、月日

が経つと、もう貰った時のように嬉しくはない。心平かになっての様に喜びの心は長く続くものではない。自分の心が如来様に乗入ってしまって我が心が軽くなって無我となるのである。夢中と眠りの中とは違う、我が身体が有るのか判らぬように心身が軽安となるのである。有るか無いか判らぬようだが無いのではないという覚えがあるのである。

第四日　大正八年十月十九日　午后

念仏道諦七科三十七道品（第五席）

念仏三昧七覚支

五、定覚支

次に定（じょう）を現わす自分の心が如来様になったのであるから能念と所念が一致してしまうのである。

月やわれ我れや月かとわかぬまで
心に澄める秋の夜の月

阿みだぶと心を西にうつ蟬の
もぬけ果てたる声ぞ涼しき

蟬が鳴いているのに自分の身体を脱けて鳴いているようだ。円光大師の夕暮の念仏をされ、その声涼しさに上人を伺うと、光明輝きて室内いとゞ明るさを、弟子達は見られたと云う、此の間の消息を定覚支と云う。

浅くとも一心に念仏すれば定中に入るものである。こゝが花の開いた状態である。植物は花が開くと雌芯雄芯の間、風または蝶蜂の媒介により胎子を宿すように、今念仏の花開く時に如来の霊感を蒙るのであり、光明または色々の瑞相が仏の花粉を受胎して信仰の種となるのである。植物の花にも無駄花があるが、これは雄芯の花粉を受けぬからである。だから如来の光明等の霊感を受胎せねばならぬのである。其の時のことを思うと、其後は、之れが信仰の本となって忘れられぬようになる。此の処を神秘の霊感妙にして—と云うのである。宗教に此処のところを分けて秘密教と開教とあるが、真言は秘密の教であって、其の内容は語ることは出来ない。しかし外形の形式は入我々入となるのである。千日の間念仏三昧を行ずると仏と抱擁して仕舞う。聖天様の如く、形式では男女相い抱擁しておるが、之は如来と衆生と抱擁するさまを形式に示されたもので、これは神秘的な事を顕わしたものである。人間の肉体、夫婦夜間のことは秘密にするもので、人に語るべきでないようなものである。これを真言秘密教というところである。公開教の如きは秘密とはしない、或宗の如きは公開教として大勢の前で歓喜の涙に暮れて泣いている。これは顕教とも公開教とも云うのである。詩経に房事のことは語るべからずと見えているように他に語るべきではない。然るに植物の花は、公開教である真宗の如きこれである。如来と接触した時のことは語るべからざるものである。之を定という。

第四日　大正八年十月十九日　午后

念仏道諦七科三十七道品（第六席）

六、捨覚支

捨とは心が安らかに無碍任運にして如何なる多忙の時でも定（じょう）と離れぬようになるのである。之は何事も練習すると自由に出来るもので、裁縫でも人と話し乍ら出来るようになる。初めの間、人は意識的にしていた事も後には無意識的にする様になる。弓術の如きも初めは注意をしないと的には当たらぬが、練習が進むと矢試をしなくても当るようになる。念仏を熟達すると如何なる場合にも行・住・座・臥に仏と倶に暮すことが出来る。之を捨覚支という。これも熟練せぬと非常な場合には却て大切な仏を離れ定（じょう）と離れてしまう。この故に之れを練習する必要がある。馬に乗るにも練習をしておれば如何ように馬が走り且つ動いても落ちることはないのである。

極楽は如来の在します処で我が心が如来と共に暮せば其処が極楽である。心が仏と離れねば自分は常に極楽界に遊んでいるのである。

七、念覚支

斯くして子供が自分の躰内に胎（や）どるように、（念覚支で）如来の心が我が胸に宿るとき人間の中心真髄即ち心の核が次第に固まって来るのである。然るに、此の人格の核に酒色を目的とし金銭を目的として他を顧みざる其の人の核は餓鬼道の核となって固まりついているのである。唯肉の楽を受けんためには盗みをしてまでも之を貪る、それを目的としているから仕方がないのである

が、また此の世では何にも彼にも仕尽して空しくなっているから餓鬼となるのである。

世の中に財産のみが生命であると思う者にはたとえ、その身が蛇になっても金銭から離れぬ、生命に代えてもと云う人は有財餓鬼である。人間が仁義五常を全うしてその心を固めた人は人間の核が固まって種子が出来ているところである。今は如来様に取りついて固まった我が心が念々八億四千の念毎に如来を中心として念じている。これを念覚支というのである。

自分の心が弥陀を中心として念じて行けば必ず如来様に霊化され、萬々物々如来の恩寵であると感ずるに至るのである。他より迫害等を仕向けられても、之は如来様が私のような鈍力でも之を鍛練して下さるために、槌を以てお打ち下さるのであると却て之れを喜ぶのである。煩悩の渋柿が熟するにつれて甘くなる即ち念々毎に弥陀の花粉を受けて仏の種子が次第に成熟して来るのである。そして遂には霊格を成ずるに至るのである。このように内面の中心核を造って行くのが念覚支である。

第五日　大正八年十月二十日　朝

御満座日午前の講話　（第一席）

八正道　（七科の第七）

一、正　見

二、正思惟

三、正　語

四、正　業
五、正　命
六、正精進
七、正　念
七、正　定

人格形成要素

人格核（我）

情操より意志の活動―熱意等より活動

七覚支にて花開き実を結び始めると、最初は渋いが中核の熟するに従うて甘い柿は甘くなって来る。大体に渋いのは次第に渋を増し顕わし最後は甘く熟するのである。人間も乳を呑むときは其の中に養分があるので次第に生長する。そのように今、如来の母の乳を呑む時は、次第に其の心が成長するのである。柿は其れ自身の主とするところは中核だけである。外側の肉は不要であるけれども、この果肉がなかったならば、人間や鳥がこれを採って核を除くことを知るよしもないから、麗しい肉を作って熟すのである。核はこのようにして生産起原の力を成就しているのである。

人格の三位

人格の核に三位がある。非人格・人格・霊格。

非人格　形は人間であるが、精神は人格を成しておらず常識を欠ぎ人面獣心と云われる三悪道の核を造っているものを云う。

人格に修羅・人間・天上とある。

霊格　これに四霊格がある。形は人間の姿であるが、心は如来様に救われつゝある者は霊格であ

る。人間の道だけを信じて往くと云う人は人格の人であり、如来の信仰にはいって来る人は遂には霊格に至る人であるけれども、その核が中途にして熟せず、花が凋んだならば霊格は成就しないのである。生有・中有・後有あり、後有に往生業事成弁。

此土に於いて信心の念を起し実が未だ結ばぬ人は浄土において胎生する。業事成弁（ごうじじょうべん）の人は浄土に蓮花化生するのである。

情操の我も人間の我と動物の我とは其の考えが異なる。人間も子供の時と大人の時とは違い、義務・権利を知っている人もあり、知らぬ人もある。また知っていてもこれを行う人あり、行わぬ人もある。信仰の自覚があって如来と我との間に情操が立って来ると、人間も妻となれば夫に貞操をたてる心が生まれて来る。また彼の人を夫にしようか―どうしようかと思う間は操はたゝぬ。そのように愈々如来の信仰が決定して操がたってくるのである。即ちこれが人格となり、それが基となって外形の行動に顕われて来る。情操を以て常に作っているところの中核を、念で外形の四威儀の三業に活動顕現して来るところが八正道である。即ち情操意志より生ずるところが八正道である。

第五日　大正八年十月二十日　朝

御満座日午前の講話　（第二席）

一、正　見

如来のお思召に契う処を正見とする。之に反す

るのが邪見である。正見は正しき了見で如来の聖意にたがうことが不了見である。

人間行動の根本となるのは第一の正見である。正見立たずば万事を誤ることになる。了見のすわり方がよければ事として皆成就する。若し、不正見の時は万行徒らになすのみで、方向を第一歩にして誤ったならば目的を達することは出来ない。西に行くものを東に行く誤りをなしたと同じである。縫物の針が正直であれば糸は正しく行くけれども、針が曲がれば糸も亦曲廻するようなものである。

正見開け且つ念仏を申しておれば如来を思う心が離れぬ、また其の心を常に牽き起さねばならぬのである。彼の授戒の時のように—作さずんば止みなん作されば是れ性無作（しょうむさ）の仮色（けしき）—と云われているように、如来（念仏）の信仰が出来て、我が心が如来の火に就いてるから真理が見える即ち正見の光によって事を分別するから能く事理が見えるのである。そうであるから三昧発得以後の念仏行者の見解は此の正見である。またこの正見は何より起り来るかと云えば、如来神聖の日光と正見の眼が合して如来の大道を行くのである。たとえ此の間の理解を知らぬ愚痴の人でも如来の光明に摂取される。三昧発得の人は能く其の人のなす事、みな正見に住して其の行為として誤ることはないのである。けれども世の中に八風（毀誉・褒貶・喜楽・等）と云われる風が吹き、肉我に捉われて正見を破り、悪道に随ちるのである。如来の灯台の光りに照らされて浄土の港に進むようにしなければ、暗中自分の了見で

船を進める時は、時として風のために何時か知らぬ間にその進路を誤っているのである。一家庭の中においても同じ夫婦、主婢が争う時、如来中心の灯台として其の分別を仰ぐ時、主人或いは親と云い乍らも自ら非なることは非なりと如来の神聖なる裁判を心に受けるのである。

儒教に良心と云うのは正見の分である。罪を犯して良知に責められるのは正見に背いている故である。一つの品においてもその了見の付けようで悪用にもまた善用にもなる。如来信仰のものはお花を見てはすぐ如来に供えるし、花道に志すものはそれをすぐ花活けにするの差が生ずるのである。一つのお銭でも放蕩息子は遊興費にしようとし、好学生は学費に備えようとする。画書きは天地万物を絵の材料として見る。農家はすべて農事の為めとして見るのである。彼の一休禅師とこんにゃく屋の問答の話（註）と同じである。

（註）　蒟蒻（こんにゃく）問答について

聖者ご講説の三十七科道品中、八正道のところで、人間行動の根本は正見（しょうけん）であり、念仏三昧発得後の念仏行者の見解はまた正見であると説かれている。そうして一つのものにおいても、その了見の付けようによって、それが悪用にも善用にも連なってくる。―その例話に一休禅師とコンニャク屋の問答が採りあげられている。

これは旅僧一休禅師と無住寺門前のコンニャク屋親爺との無言問答である。

―禅師は相手を見据えながら「汝の心は」との意をこめて、胸の前に両手で小さく輪を造って問う。

コンニャク屋の親爺―俺のところのコンニャクはそんなチッポケじゃない、もっと大きいんだと両手を張ってデッかく示す。これを見た禅師「心は大海の如し」と受け、次に禅師「十方世界は如何ん」と両掌の五指を拡げて前に突出す。親爺―十丁で幾何かと尋ねられたと思い、すぐさま五百文だと、片手五本の指を開きざまにニュッと前に出す。これを禅師は「十方世界は五倫（五戒）で保つ」と受けた。更に禅師は「弥陀三尊は如何に」と手指の三本、親爺の顔前に示す。これをうけた親爺―俺んところの大きなコンニャクを三百文に負け（価引）ろッたってそりゃ無理だ。売るものか…と「アカンベー」のつもりで人差指を目の下に舌を出さんばかり強く引き下げた。禅師は「弥陀三尊は眼の下にあり」と解し、この親爺、門前のコンニャク屋ながら大したものだと早々にその場を去ったということである。

この話。コンニャク屋の親爺にとっては、何時も取り換す商いの言葉で、極くありふれたことであるが、一休禅師はこの世、何事も「善意」を以て見ているから此の親爺の所作が悟道に叶うものと見受けられたのであろう。この消息は「迷えるも悟れるもまた善悪も心ひとつのおきどころにして」の聖者の道詠にも通じるものである。

聖者御講聴書の筆記にはこの禅問答はその筋道だけが六、七行の中に収められている。このことについて丹波円浄師は其の末に「お上人（聖者）御講話中に蒟蒻問答と云う挿話あり、聴講当時は委細筆記し居らず、後には話の筋をも打忘れたるにより、昭和十七年六月末、筑後本郷西光寺権藤

（賢祐）上人所持の落語全集に出てありとの同上人の仰せを喜び貸送し貰いて大略抄写すること左の如し。―と、落語問答が転記され、最後に、右昭和十七年七月四日夜深更に写す。―とある。尚、この蒟蒻問答については同月廿六日に福岡市天然寺にて当時講談社発行の修養全集第四巻にある豆腐問答がまた転記されている。

包めども人の心のよし悪しは
まさかの時に現はるるかな

第五日　大正八年十月二十日　朝

御満座日午前の講話（第三席）

八　正　道

一、正　見

二、正思惟

三、正　語

次に正語とは敬忍したる人の心、平生はつゝしんでいても、暫く其人の任意にさせておくと本性が現われるものである。心善き人に近づけば善き人となり、善き事を語りまた善き事をするのである。そのようにして真の念仏者、即ち如来信仰の人は何事も念仏解釈となる。思うことも皆、仏様の事を思うようになる。言語でも、無益なことや偽りには遣（つか）わぬようになるのである。

四、正　業

身体の行為。此の身体で如来のお思召をなしてゆくのである。この身体は如来の命（おゝせ）を

果たすのであるから悪いことは出来ないのである。けれども、如来の善い光の電気が通じているこの身体を、常に善い方に仕事の出来るように習慣させていかぬと切角の如来の電気は通ずることは出来ないのである。

五、正　命

身体の生命は滋養分でさえあればよいのである。然し、盗んだものでも、詐偽したものでも、滋養分にはなるけれども正しいものではなく、如来の御思召に契う命（いのち）ではない。この身体の命は「渇しても盗泉の水を飲まず―云々」というようにするのが正命である。いま心の命も即ち信仰の命も或時は肥大し、或時は痩せてしまう様な時がある。であるからして、心の日暮れで、御思召に契う心の命を継ぐには五種正行の資糧、養分を取らねばならぬ。これによって法喜禅悦の心が生ずるのである。念仏を申すのにも始の間は喜びざまであるが、次第に念仏を深めて行くと何となく心持がよくなって来て、申す時間も長いと思わぬのは禅悦である。何となく有難く嬉しいのは法喜である。この信仰の命を生き〳〵とさせるのは五種正行の中心、即ち称名を進めなければならぬのである。

（こゝに広島高等師範の女教師の学校教育と家庭での真宗安心に基く、凡夫は元来罪悪にして一善も無きものなりとの、板鋏みで煩悶するお話が取上げられているが割愛します。）

第五日　大正八年十月二十日　朝

御満座日午前の講話　（第四席）

八 正 道

一、正　見
二、正思惟
三、正　語
四、正　業
五、正　命

六、正精進

七覚支中の精進は如来に向いての精進である。今は如来が世間に向って活かして下さる方の精進故に単に働くのではなく、如来の御思召の精進を世に活かすことである。これが即ち仏心仏行である。この精進のない人は少しく世中に苦痛を感ずれば死を求め浄土を欣（ねがう）のであるが、これは誤りも甚しきものである。暑さ寒さにつけて死んで早く極楽へ行こうと云うのであるが、未だその志は如来に致すの足らざるものである。吾人は威神力の名刀を以て世の中の悪を切り断つのであるが、刃が錆びていては人を殺すことは出来ない。人を殺すことの出来ない刃物は人を活かすことも出来ないのは必定である。人を済度するに当って信仰の刃が十分に切れなければ済度することは出来ない。此の刃の錆は如来の光明にまたなければならないのである。我が心の刃を磨くには善い砥石が要るのである。これは世間の荒砥によって寒暑逆境の磨きがあるからして、極楽世界の平穏な処よりも、此処娑婆の方が遷善、善に更り易いのである。

その故に「此土において一日一夜するは無量寿国に在りて善を為すこと百歳するに勝れたり」と説かれているのである。念仏を申すのでも始めの

うちは苦痛だが後には興味を覚えて来る。天地間のこと皆、そうでないものはない。

興味が生じて仕事が奇麗で容易に出来てくるのである。世間によく努力主義、活動主義と云うてみだりに活動するのは誤りで、如来の御思召に、従う事が即ち正精進である。

七、正　念

前者の念（七覚）は内面を作っていくのだが、此度は世に向って活動する上に於いて、如来を念じて離れぬのである。此の念は、口に南無阿弥陀仏と云うばかりでなく、三業、四威儀に為すことを念ずるのである。今、我がこの衣の色は白であるが、これを如来の藍瓶の中にしば〳〵漬けると、後には藍の水と同一の色となるように、如来と我とは同じ心となってしまうのである。炭が火になるのと同じで、衆生の心の炭に火がつけば活動力が生じて来る。如来と離れては活動は生まれてこないのである。

第五日　大正八年十月二十日　朝

御満座日午前の講話　（第五席）

八、正　定

自分と如来とが一致して分けられぬところを云う。仏が我か、我が仏か―親と子の心が一致したる様が人格の核が熟した時である。七覚支に花開き、八正道にその実が結ぶのである。

地獄は顚倒の見、即ち邪見より来るもの―逆様に来るものである。悪を善と思い不正を正を思っ

ているのが凡夫である。邪思・邪語・邪業・邪命・邪精進・邪念・邪定と活動して地獄の核を熟する故にこれを蒔けば地獄の果を生じ、煩悩が次生に生じるのである。

人格形成。形成とは実を結ぶところを云う。今日、学問上、法律上では年令十才以下は放火、盗賊してもその人は人間としての心格が熟していないから有罪でなく、子供は善悪という事が判らぬから核は成熟しない。それ故に蒔いても果は生えて来ないのである。青（成）年以上になれば核が成ずる故に蒔けばその果が芽生えて来るのである。それは恰も柿の木の枝についた一方の実は中途で落ち、他の一方は雨風にも落ちずして赤く熟れ、この柿は色も麗わしく肉も甘く中核が立派に熟していて、これを蒔けば生えるようになっているのと同じことである。我等の念仏も熟すれば柿の実と同じで、途中で落ちるものは目的を達せずして落ちるものの、熟して落ちるものは目的を達して落ちるものである。

宇宙万物内存
- 一切智　智力（法身より万物生ずる場合）
- 一切能　意志（大宇宙の分我なる小宇宙）

我等を造られしその力を一切能と云い、まづ先きに発達する。その後に一切智が生じて動気を生ずるのである。一切能は未だ智慧なき故に無明である。之れに一切智が加わる時に能は方に随従して智慧が活らく。能を中心として智慧が働くから此時は罪となるのである。此の智が大悲招喚の光

に照らされ明智を生じ、後は能が正見に従うて活らくのである。

已上にて橋爪（実誠）師の筆記訖わる。

右転写　昭和十七年四月廿三日起事、昭和十七年五月十六日午后十時五十分也。

（丹波　圓浄記）

（その後記に）

昭和十七年五月廿四日、（此の日念仏講日なり）粕屋郡勢門村庄西林寺の座敷に於いて山主橋爪（実誠）上人と談合、その上人のご筆記と自ら転写した分とを読み合せ校正し終った時は正に同日午后五時にして初夏の雨、霖々として降り、カキツバタ及びサツキの花咲きあり。—と。

附　記

広島潮音寺での「念仏三十七道品」の講演別時は十月十六日より五日間であったが、当時の広島地方気象台の記録によれば、大正八年十月十七日（第二日）が曇天で、外は皆、晴天、而も後三日間は快晴とあり、まことに好天気に恵まれた講演会だったようです。

尚、丹波師手元の記帳によれば、十月二十日午後四時に三昧会は閉会となり、当日は広島市九軒町の心行寺（佐々木為興上人自坊）に宿泊し、翌二十一日、笹本戒浄師の講話があり、二十二日は厳島参詣、弥山に登り光明院で少憩し、其の夜半広島駅を発し帰山した―と。

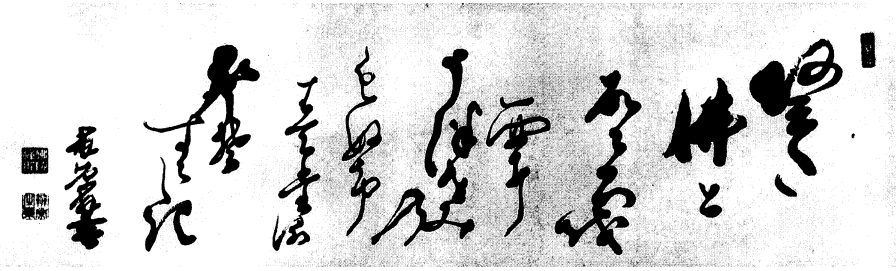
また、丹波師は当時のノートに幾度となく目を通され、色々と三十七道品に関する先師の「要文」を書き附しておられる。また、同師所蔵のノートには必ず、頁数が書入れてりあり、其の散逸の難に備えられています。今度の筆記ノートは二冊あり第二号は第一五七頁から始まり第二二八頁に終っています。今度前掲の三十七道品の要文（筆記ノート第二百十九頁）その末尾には右、大正九年七月十五日称讃浄土経講説より抄出したり―と、記載されています。

丹波師は、このような厳正な方であったので、去る明治四十五年春、筑後善導寺に下向されていた聖者を、屈請して、自ら若松の自坊に招かれた波多野諦道上人は、その徳化を更に弘めんと、最初に案内された処が香月の専福寺であった。山主の丹波師は「安心」について兼ねてより心配され

ていたが、聖者に値われた途端に、其の疑惑は雲散霧消して、尊崇畏敬の念で一杯だったと云われています。

聖者と心の絆は、大正六年聖者九州下向の折に、他日、支那伝道に旅立つ時は、是非随行するようにとの勧めがあった程であります。

尚また前掲の、橋爪実誠師手許の筆記は、原稿用紙に書き改められていて、両師読み合わせの「講演聴書」校正確認のためには大いに参考となりました。その最後に同師は、〃私は此のところ、筆記粗漏を覚ゆ、他師の御参照を乞う。〃と附記されていて、あとに遺すべく、極めて慎重な思いであったことを感じました。



大正八年七月篠栗西林寺にて別行中聖者揮毫

阿みだ佛と心を西にうつせみの
もぬけはてたる声ぞ涼しき

後　書

この念仏三十七道品の講話聞書は、丹波圓浄師、橋爪実誠師の両者が、値遇の縁忘れ難く、後年更に相寄り、当時の聞書ノートを照合して書綴られたもので、聖者の脚跡を慕うものにとっては誠に善き縁（えにし）ともなりましょう。九州光明会機関誌「めぐみ」に昭和四十七年五月号より昭和五十二年十二月号迄二十三回に渉り、其の披露をしましたところ、諸者の方より、更に冊子して貰いたいとの要望があったのですが、其の機を得ず、今日に至りました。聖者八十回忌を迎え、改めて紹介し得ましたことを心から悦んでおります。

今度の出版に当りましては、九州光明会の並々ならぬ御高配を戴きました。また、九光「めぐみ誌」編集主任であった、故中川順一先生の御芳情を含め、特に東洋大学教授の文学博士河波昌先生に御校閲を頂き、漸くその責めを果たし得た思いで心から感謝いたしております。

尚、この出版手配につきましては豊前善光寺菅野俊光師ならびに明治印刷株式会社坂本良太氏に望外の御援助を頂きました。心から厚くお礼を申し上げます。

合　掌

平成十一年　春彼岸

福岡県篠栗町
宝樹山　西林精舎　常称庵にて
編　者　識　す

編者紹介

橋爪勇哲

はし　づめ　ゆう　てつ

大正２年12月11日　福岡県粕屋郡篠栗町屋仲255番地に生る
昭和10年　京都仏教専門学校(現仏教大学)卒業
昭和11年１月　福岡歩兵第24聯隊入隊～昭和12年１月除隊
昭和12年９月　浄土宗満州開教区開教師
昭和14年６月　満州佳木斯教会主任引退
昭和16年４月　関東州大連明照寺より満州綏西歩兵第31聯隊へ應召
昭和21年７月　赤道下南レンバン島より宇品上陸復員
昭和22年１月～昭和25年４月　福岡県庁職員
昭和24年11月～平成元年５月まで　福岡県篠栗町西林寺住職
昭和27年　福岡県粕屋郡篠栗町教育委員(公選４ヶ年)
昭和41年９月～昭和55年12月　財団法人光明修養会機関紙(大光明)編集発行主任
昭和47年12月～平成４年４月　法務省人権擁護委員(福岡)
昭和63年１月～平成10年４月　佐藤ビジネス専門学校理事
平成２年１月～平成４年１月　財団法人光明修養会九州支部長
平成２年12月～平成５年12月　財団法人光明修養会理事長
平成６年１月　財団法人光明修養会顧問

著書　「妙好人　荒巻くめ女」

念佛三十七道品御講演聽書

平成十一年四月八日発行　(非売品)

編者　橋爪勇哲

発行所　財団法人　光明修養会　九州支部
大分県宇佐市大字下時枝二三七
電話　〇九七八(三二)七六七六

印刷　明治印刷株式会社
大分県宇佐市大字長洲六〇七